

夢の女

岩谷書店

1948

昭和二十三年九月十日印刷
昭和二十三年九月十五日發行

夢の女 定價百八十圓

著者 菱山修三ひしやま しゅうぞう

發行者 岩谷滿いわたに みつ

印刷者 渡邊裕介わたべ ひろすけ

東京都港區芝西久保巴町十二

發行所 岩谷書店

電話芝(43)一九〇四—九
會員番號A二〇九〇—一四
振替東京一〇〇二二四



(第一中外印刷株式會社)

詩
集

夢

の

女

ENNU

夜 明 け

夜が明ける。中空に、星が消えかかる。星が一つ、二つ、三つ、品よく、あはく、すがすがしく、まだかすかに、氣遠いばかりのあてやかなひかりを残して、砂丘の上、砂丘をめぐつて繁り合ふアカシヤの木の上に、數あるそれらの星が消えかかる。數千年來今日始めてのやうに、今日のひと日があたらしく明ける。雞が鳴いた。雞は先刻鳴いた。雞はもう、とつくに夜明けを豫感して鳴いた。ヨロツパで、中國で、鳴くやうに息長く鳴いた。鴉が罌を捨てて出て來た。彼等は仲間を語らつて、アカシヤの梢から梢へ、下手な警鐘を鳴らしてまはる。めいめいが休息の場所から起き上り、めいめいがその屋根の下を離れる時が來た。やがて日が上るだらう。昨日と

はまた別の、いままででない、今日の歌を、自分もうたひ、ひとにもうたはすために、あたらしい勇氣と意志の太陽が上る。夜明けと共に、生きとし生けるものは、今日のひと日の開始にいさみ、傾いた心を揮ひ起し、自分で自分をはげまし、また辛抱強い一日の旅程に就く。いつの日でも自分のことは自分でするより仕方がない。かうして内部をおとづれる、この新鮮な緊張に、皆が皆愕いていい時だ。僕等、ともすれば衣食に窮し、その日暮らしに倦きあきしたもののたちも、まだ眠たげな黄いろいランプを消して、單純に、重たい心の影を拂ひ落す時だ。西の空に、あはれ月が落ちる。夢よりもあはれその月の没りを、なさけふかくあはれむのもいい。はかないまでに綺麗に、絶え入るやうに、星が消える、星が遠のく。彼等の落城を見送つて、まだ青い夜明けの空のなかに、小鳥が啼き出す。なんの小鳥だらう？ 彼等は彼等の歌をうたふ。波音も目ざめ、風も立つ、波も立つ。はや網を引く聲も、波音と共に、風がはこぶ。

——漁夫生涯竹一竿

夏は終つた。黄いろくす枯れた雑草の上に、秋はもう、眼の前に
忍び寄つて來た。自分の生涯を顧み、生涯の残りの日の、計を立て
る時が近づいてゐるのかもしれない。この夜明け、このしづかな丘
の、またこのしづかな小屋をめぐる夜明け、僕の心に確と記して
もいい、これはまことに絶えてなかつた心の夜明け、はやあの草も、
あの木も、まだ啼いてゐるあの蟲も、ながく燃えつくした生命の、
それぞれの力を知りはじめてゐる。そんな豫感に、みんな顫へてゐ
る。僕の心よ、もう眼をさましてもいい頃だ。夜が明けた。お前の
貧しい心も、いさましく立ち上つて、谷間の底の、もう動き出した
町の中へ下りてゆく用意をするがいい。ありとあらゆる人間の、歎
き悲しみ憤りを、もう一度お前ひとりで背負ふだけの、勇氣を持ち
直して、出かけるがいい。

冬

冬は来る、かはりはてた、くたびれた姿をして、世界の壁を灰色に塗りながら。冬は来る、こともなく、疲勞と倦怠と絶望とを採り集めて、昔のままの荒涼を引き摺つて。僕の不幸を勇氣づけるために、それはまた何を持ちこんで來たのか？ 待つがいい。合圖の鐘はまだ鳴らない。ふが いい、勇氣を出して。僕の不幸が輝くのはもつと先のことだ。ああ、冬のなかに僕が、僕のなかに冬が、さうして、日ざしは、いちめんに枯れ草の上に。

降りしきる落葉に

中空から、木の葉が降つてくる、降つてくる。

いま、ひとつの眞實を読むために、僕等の眼の前に、大きな書物はひらかれてゐる。

が、どんな眞實を告げるために、はてしない空の青さのなかで、無数の小鳥達は羽搏くのか？

中空から、木の葉が落ちる、落ちる、はてしないしづけさをみだして。

燃え落ちる火のなかに、燃えつくして、いま何が眠りにつくのか？
木の葉が落ちる、落ちる、燃え落ちる火のなかから、いま何が眠

ざめてゐるのか？

ひろい世界のなかで、このひろい世界を支へながら、一人の人間が眼ざめてゐる。

一人の人間、確かに、僕はゐる、降りしきる落ち葉のなかに無数の小鳥達と戯れながら。

芝生の上

いつたいお前の青春はどうしたのか？

ポール・ヴエルレエヌ

あたたかな、黄いろい芝生の上に、横になつて、眼を閉ぢてゐる。
それは私なのか、本當に、さうしてゐるのは私なのか？

そんな私の耳に、いつせいに這入つてくる物音は、大氣のなかを
飛びまはるぶ、他界からくるやうに中空を落ちてくる木の葉、それ
から、遙かに遠い町の音。

眼をひらくと、空が青い、空がどこまでも深く、青い。

大きな樹が、てつぺんから、さかんに枯れ葉を降らしてゐる。

さうして、樹は、みるみるうちに裸かになつてゆく。

ああ、みるみるうちに裸かになつてゆく、あの高い樹の、てつぺ

んで、太陽は小さく、釣りランプのやうに揺れてゐる。

なんだか氣遠く、みんな、はなればなれになつてゆく。

めいめいが海よりも深い孤獨へ落ちてゆく。

さうして、誰が、私に告げるのか？

「——そこで、お前は、なにをしてゐるの？

お前は、なにをして、暮してゐるの？

いつたい、お前の青春は、どうしたの？

言つてごらん、お前の青春は、どうしたの？」

とある冬の日に

落ちてくる陽ざしのなかを、ぶゆが通り抜ける。

落ちてくる陽ざしに、倒れた枯れ草が、黄いろく燃え上る。

窓の敷居に、腰を下して、明るい冬の日に顔を向けて、僕はゐる、僕は見てゐる、さうして、なにを見てゐるといふのだらう？

枯れ草を分けて、まばゆい陽ざしのなかを、風は来る、風は流れてくる。

このしづけさの底で、裸か木は素裸かのまま、空は、かはりなく、あをあとと澄んだまま、さうして、僕の胸の底で、さわいでゐるのはなんだらう？

ああ、空の向うに、また空がひろがる、海も地平もかくれたまゝ。
さうして、枯れ草は枯れ草の上に倒れ、落ち葉は古い落ち葉の上に積る。

僕は見てゐる。まばゆい陽ざしを、とびまはるぶゆを、ああ、遠い、幼い日の、火よりもあつい、あのあこがれを。

窓

アカシヤの裸か木の上で、鴉が一羽、二羽啼いてゐる、影繪のやうに空を透かして。

また音立てて、風がくる、乾いた空の重たい鉛板を持ち上げて。

海はある、枯れ草の向うに、薄刃のやうにけぶりながら。

さうして冬は、絶望に眼かくしをして、積る疲勞を集めて、やさしい挨拶はよそにして、海の方から、かぶさるやうに遣つてくる。